

# アトリエ 琉游舎 だより 93号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)  
 琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

2020年12月2日発行

## 大雪 熊 蟄 穴



- 「大雪」は本格的に冬が到来するころ。二十四節気のひとつで冬至までの期間を指します。山々は雪に覆われ、平野にも雪が降り積もります。今年は12月7日から20日まで。まだまだ山の雪景色には遠く、冬タイヤへの交換も必要ないようです。地球温暖化が原因なのか暦と実際の季節感のずれは最近甚だしいようで、いずれ暦や季語の再編成が必要になるでしょう。
- 二十四節気を初候・次候・末候の3つに分けた期間を七十二候といいます。「熊蟄穴（くまあなにこもる）」は「大雪」の次候、熊が冬ごもりに入り春まで穴にこもる頃です。
- 今年はドングリの生育が悪くえさに困った熊の民家周辺への出没が頻繁に報じられました。柿や葡萄を無心に食べる映像を見ると熊も美味しいもの好きだなと妙に感心してしまいます。
- ちょっとした低山に入るときも、常に熊よけの鈴とラジオを鳴らして歩くようにしていましたが「熊蟄穴」で4月までは熊に遭遇する心配をしないですみそうです。とっていたら満足な餌が食べられなかった場合や比較的温暖な季節では冬眠しない熊もいるようなのです。人は冬の間の食料保管方法を身につけたお陰で、食料探しに奔走しないで、冬も活発に活動できるようになりました。しかしお腹に食料を蓄え損なった熊はそうはいきません。温暖で体の活性も衰えることなく、ただただえさを探し求めてさまよう熊には会いたくありませんね。
- 会いたくないと言えば今年は熊以上にコロナウイルスです。熊を見たら死んだふりをすればよい？はずですが、見えないコロナにはその手は効きません。冬に動きまわる熊が危険なように今年は無闇に動きまわる人間も危険です。この冬は「熊蟄穴」を見習い「人蟄家（ひといえにこもる）」が良さそうですね。

### 12・1月スケジュール

月	火	水	木	金	土	日
			3 映画会 13:30	4	5	6 写経会 13時半
7	8 読書会 13時半	9	10 映画会 13:30	11	12 詩話会 13時半	13
14	15	16	17 映画会 13:30	18	19	20
21	22 読書会 13時半	23	24 映画会 13:30	25 居酒屋の会 16時半	26	27
28	29	30	31 映画会 お休み	1月1日 新年祝祷会 0:00	2	3
4	5	6	7 映画会 お休み	8 休舎	9 休舎	10 写経会 13時半

**読書会**  
12月8日(火)  
12月22日(火)  
13時半から

**写経会**  
12月6日(日)  
1月10日(日)  
13時半から

**詩話会**  
12月12日(土)  
1月16日(土)  
13時半から

**居酒屋の会**  
12月25日(金)  
16時半から

**映画会**  
毎週木曜日  
13時半から

9月初頭に蒔いた大根と蕪は本葉が出たとたん虫たちに丸坊主にされてしまいました。間引いた葉の菜っば飯と塩漬けを楽しみにしていたのですが、虫たちの方が上手でした。畑の見回りを二、三日怠ったらこの始末です。美味しいものは人も虫も同じなのでしょう、辺りに大量に生えている雑草には目もくれず、私のおかずを集中攻撃の横取りです。虫食い葉っぱを尻目に我が物顔で増殖する雑草を、しばらく私は除草する気にはなれませんでした。それでも植物はたくましいもので網目状に残されたわずかな緑と根っこさへあれば、いつの間にか地中に大根と蕪を実らせ始めました。昨年よりは小ぶりですがそれでもよく成長しました。

10月に蜂谷柿を物干し竿に30個つるしました。一ヶ月で食べ頃となり先日の映画会で皆さんに食べてもらいました。美味しい顔を見るとせっせと柿の皮を剥いたかいたかというものです。少し堅めのものも、と思い残り15個をつるしたままにしておいた一週間後の朝、洗濯物を干している時は確かに15個の干し柿は健在でした。ところが今回も皆さんに食べてもらおうと14時に収穫に向かうと、干し柿は跡形もありません。物干しには白い吊るし紐4本と柿のへたが15個残されているだけ。鮮やかな柿泥棒です。犯人は誰でしょう。状況から判断するとカラスがホバリングしたまま15個も食べられるとは思えません。種も食い散らかした跡も残っておらず、実だけをもぎ取っていったようです。手を使える生き物、熊か猿か。現場を押さえても彼らでは如何ともし難いでしょうから、干し柿は今一番必要とする生き物のお腹に収まったと考えて諦めます。

仏道修行の重要な実践徳目である六波羅蜜<sup>注1</sup>の一つに「布施」があります。虫たちに喜んで葉っぱを施す、あるいは獣に喜んで干し柿を施す、これも布施と称するべきと頭では分かっているのですが、やはり食べ物の恨みはそう簡単ではありません。その瞬間は、農薬を撒く（害虫退治！）、唐辛子を練り込んだ干し柿を吊す（リベンジ！）など、煩惱まみれの妄執が頭を駆け巡ります。私は自分の喜びを奪われたと考えたから頭に血が上ったのです。しかしすぐに「布施」の無理解に気づかされました。これは奪われたのではなく自分の欲や妄執を手放したことになるのではないかと。これこそ「布施」を体得する機会なのではないかと。

布施は僧侶との関係で見る限り非常に理解しづらいものです。僧侶に宗教的行為をしてもらえば皆さんは布施（金品）を差し出すでしょう。僧侶や寺院はあたり前のようにその布施を受け取ります。これが単なる経済行為であれば宗教活動にも税金をかけなくてはなりません。僧侶は教えを施し（法施）受けた側は代わりに金品を施す（財施）というような論理で布施のやり取りを純粋な宗教活動であると正当化していますが、この説明だけでは布施は何かに対する対価という構造を抜け出すことが出来ません。布施の功德は巡り巡って回向としていずれ自分に戻ってくるのですと言われても、それは布施を受ける側（僧侶）に都合のよい理屈です。法施と財施が経済関係の中でしか成り立たないのであれば、それは宗教とは無縁のものなのです。

布施は「持てるものを分け隔てなく施す」ものでなければなりません。「施しを必要としている人が、施しを受けることによって救われる」ことが目的ならばそれは「利他」です。寄付と同じ行為です。布施の本来の目的は「自利」です。「施しをすることによって、施しをした人の方が自らの執着をはなれ安らぎの処へと歩むことができる」という自利のあとに「その施しを受けた人が救われる」という利他があります。自己の修行により得た功德を自分だけが受けとる（自利）こと、それが他の人々の救済のために尽くすことにつながる（利他）。この両者を完全に両立させた状態に至ることが大乘仏教の理想とするところです。私たちは自分の持てる執着物を喜んでさし出し、それを受けてくださった生きとし生けるすべてのものに「ありがとうございます」と感謝し続けなければなりません。自分が纏う重たい執着の衣の一枚を受け取ってくださるからです。そしてありのままの自分へとまた歩いていくことができる、それが布施の行いです。

雑宝蔵経の中に「無財の七施」という教えがあります。財産もない私たちができる施として「常に優しい眼差しで人と接すること（眼施）、いつも和やかに笑顔で人と接すること（和顔施）、優しい言葉で人と接すること（言辞施）、自分の身体で奉仕すること（身施）、他の人に対して心配りすること（心施）、席や地位を譲ること（床座施）、自分の家や部屋を提供すること（房舎施）」以上の7つがあげられています。私たちも日常的に行うことが可能な施です。思いやりや優しさなどの心があれば実践はさほど難しくないかもしれません。しかし、いつでも、どこでも、誰にでもとなったらどうでしょう。一気にその実践は難しくなるはずですが。その理由は簡単です。人の為に行おうとするから難しいのです。私たちに煩惱があるかぎり、ここまでやっているのだからもっと感謝や見返りがあっていいはず、という本音がいつか必ず現われます。自分の為に行っている行為であればそのような気持ちがわき上がる心配はありません。法施も財施も無財の七施もすべて自分自身の執着を手放す自分の為の行いです。法力も財力もない私が、日々を豊かに楽しく心安らかに過ごすためにさし出すことが出来る施は無財の七施だけです。この施を物惜しみせず感謝と喜びとともに続け続けること、そのことが、私がお釈迦様から法施を頂き続けることそのものとなるのです。

虫に食べられた菜っ葉も、獣に取られた干し柿も、彼らにはそれがなければ餓死するかもしれない死活問題だったのでしょ。来年はどう対処するか思案のしどころです。今から対策を練って彼らには指一本ふれさせないか、彼らの食欲に任せたままにするか。愛護、共棲、不殺生、慈悲、自利、執着 琉游舎：戸井 出琉・恭子 などなど、いろいろな言葉が交錯する中を過ごす毎日が、また豊かで楽しくお問い合わせ先：0287-53-7848 08033508152 矢板市大槻2319-17コリーナ矢板C-850 安らかな日々です。来年の顛末はまた1年後のお楽しみ。 メール：toi10lizuru@outlook.jp